



「授時曆」—訳注と研究—

藪内 清・中山 茂著

アイ・ケイコーポレーション 176 頁
定価 4,800 円 (税別)

解説書 &
研究資料
お薦め度

☆☆☆

今年、著者の一人である藪内 清氏が生誕百年を迎える。まさに記念すべき年に本書は出版された。

まずは、本書のタイトルにもなっている「授時曆」について簡単に紹介しておこう。「授時曆」とは中国の元の時代に郭守敬や王恂等によって編纂された太陰太陽暦の暦法である。特色は暦を作成するにあたって事前に綿密で正確な天文観測を十分にやったこと（郭守敬）と並んで、高度な数学を使っていること（王恂）である。その結果として中国史上最高の精度を実現し、最も長く使われた暦なのである。

本書は全 4 章から構成されており、それぞれ独立した内容になっている。第 1 章は藪内 清氏、第 2-4 章は中山 茂氏がそれぞれ執筆している。3 章までの内容は 1960 年代にはほぼ完成していたが、「限度」という用語の満足な解釈ができなかったため、出版を控えていた。月日は流れ、その間に藪内氏は亡くなられてしまったが、やっと納得できる「限度」の解釈ができたことから今回の出版に至ったと、もう一人の著者であり、藪内氏の弟子にあたる中山氏が前書きで語っている。

第 1 章「元史授時曆経譚注」は暦経の譯訳と近代の数式や図などを用いた解説からなる。暦経とは暦計算に必要な天文定数や日月惑星の位置計算法を述べたものである。

第 2 章「授時曆議読み下し」は暦議を訓読したものである。暦議とは暦の特徴を論じた総論のようなもので、採用した天文定数の根拠などが述べられている。

第 3 章「授時曆議の研究」は暦議に関する中山氏の研究成果が著されており、観測装置や影の長さの観測から冬至の日時を決定する数学的計算方法が詳しく書かれている。

第 4 章「授時曆研究補論」は本書の出版の障害と

なった「限度」の意味がいかなるものだったのか解説されている。

書評の依頼を受けるにあたって、本書が教科書的な書物であると期待した。ところが読み始めてみると、そうではないことがわかった。著者は、本書で暦法の勉強をするのがよいだろうと勧めているが、かなりの予備知識がなければ本書を読むには苦勞するだろう。そうは言うものの、中国の暦法・暦書がいったいどのようなものかを知るのに適した本であることは間違いない。

巻末には用語集が付いているが、残念ながら十分なものではない。現在とは異なる角度や時間の単位系に関する詳しい解説がなされていないため、本書で初めて暦法を勉強しようとする理解に苦しむ可能性がある。文字の書き分けなどを統一し、読み手を惑わさないような工夫をすれば親切だろう。基礎的な用語についても丁寧な解説があれば、それを読むだけでも十分勉強になる。表の類もあまり見やすいものではなかったので改善すべきだろう。さらに、巻末に暦法を勉強するにあたって参考となる文献の一覧があれば教科書的な位置づけになると感じた。

細かいことだが、誤植がかなり目立ったことも気になった。特に小数点の「. (ピリオド)」と位取りの「, (カンマ)」がごっちゃになっている箇所がある。また、自分の不勉強さから漢字の読み方がわからず、辞書を片手に本書を読んでいた。特に日常馴染みのない人名や専門用語にはルビが振ってあってもよいのではなかろうか。

最後に、中国の暦法を研究することは、天文学史や数学史といった科学史だけでなく、中国史などにも関連してくる。この本をきっかけに、いろいろな分野の研究者に関心をもたれるような素晴らしい研究が多数行われることを期待したい。

山本一登 (京都大学/人文科学研究所)